

## 体育における学習意欲とパーソナリティ特性との関連性

### Relationships between achievement motivation for learning in physical education and personality characteristics

西田 保\* 西田 紀江\*\*

Tamotsu NISHIDA \*, Norie NISHIDA \*\*

The Achievement Motivation in Physical Education Test (AMPET) was developed by Nishida as a scale for measuring achievement motivation for learning in physical education class. This study examined the relationships between achievement motivation for learning in physical education class and personality characteristics.

Subjects were 378 junior high and high school students (193 males and 185 females). The subjects were tested achievement motivation by the AMPET and were also examined personality characteristics by the Yatabe-Guilford Personality Inventory.

As hypothesized in this study, the students who had desirable characteristics such as general activity, ascendance, leadership and social extraversion, showed high achievement motivation and low anxiety in physical education class. On the other hand, the students who were dominant in depression, inferiority feelings, nervousness and emotional instability, showed high anxiety in physical education class. Similar results were obtained for junior high and high school students.

#### 緒 言

体育の授業においては、教材としての各種の運動や活動に自発的、積極的に取り組み、それらの運動にかかる学習活動を卓越した水準にまで到達させようとする児童・生徒の意欲が重要である。それは、意欲をもって活動するかどうかで、学習の能率が違い、理解度や獲得のされ方も異なってくるからである。意欲的に行動することの重要性を指摘する出版物も数多くみられている（例えば「やる気の心理学<sup>8)</sup>」、「やる気を育てる教室<sup>2)</sup>」、「子どもの意欲を育てる心理学<sup>16)</sup>」、「やる気を育てる<sup>9)</sup>」、「子どものやる気を育てる10則<sup>15)</sup>」、「子どもの自発性と学習意欲<sup>4)</sup>」など）。児童・生徒の学習意欲をいかに高めるかという問題は、体育指導者に限らず教育者全体にとっても重要な関

心事である。

体育における学習意欲に関わる様々な研究や問題を推進あるいは解決していくために、西田<sup>13)</sup>は、まず、学習意欲や動機づけに関連した従来の研究や論説<sup>1) 3) 6) 7) 17) 18)</sup>を概観したうえで、従来不明確であった体育の場でよく用いられる学習意欲ということばの概念を明らかにしようとした。そして、体育における学習意欲という概念に対して、その概念に最も近い心理学用語である「達成動機づけ」をその理論の中核として構造的に把握し（図1参照）、「体育における学習活動を自発的、積極的に推進させ、それらの学習を一定の卓越した水準にまで到達させようとする内発的動機づけ」であると定義した。さらに、その構造図に依拠した（達成動機づけを中心とした）体育における学習意欲検査（Achievement Motivation in Physical Education Test……AMPET）を、これに関

\*名古屋大学総合保健体育科学センター

\*\*日本福祉大学非常勤講師

\* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

\*\* Nihon Fukushi University

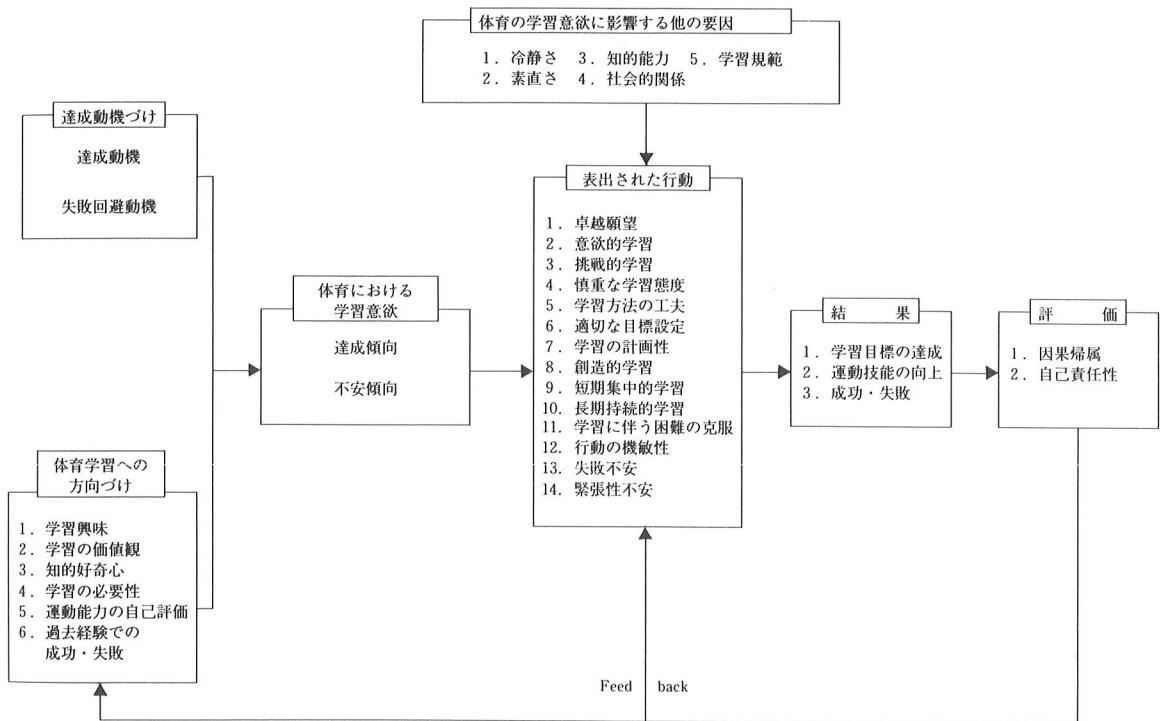


図1 体育における学習意欲の構造

する一連の研究を経た後に尺度構成している（AMPETの作成過程については、西田1985<sup>10)</sup>、1986<sup>11)</sup>、1987a<sup>12)</sup>、1987b<sup>13)</sup>を参照）。

ところで、AMPETは、体育での学習場面や環境などといった状況変数を加味して作成されたものであるから、この尺度によって測定される学習意欲は、状況の変化や時間の経過に伴って変わらうという不安定な要素も持ち合わせている。つまり、体育における学習意欲は、学習場面での状況変数と、その個人が持っている安定した内的レベル（パーソナリティ特性）との相互作用によって形成されたものであり、図1からも予測されるように、比較的安定したものとして考えられるのである。従って、児童・生徒の体育における学習意欲を問題にする場合には、個人が有している安定した内的レベルと比較的安定している外的レベルとをともに考慮していく必要があろう（このことは、スポーツ適性としてパーソナリティを

考える中で、Martens<sup>5)</sup>や岡沢ら<sup>14)</sup>も指摘している）。そして、そのためには、両者がどのように関わりあい、また、どのような関連性を持っているのかを知らなければならないであろう。両者の関連性が明確になれば、それぞれのパーソナリティ特性に適した学習意欲の高め方などが可能となるであろう。

本研究は、AMPETで測定される体育における学習意欲が、安定した内的レベルとしてのパーソナリティ特性とどのような関連性を持つのかを明らかにする目的で行われた。

## 方 法

### 1. 調査対象者

対象者は、中学生男子67名、女子62名、高校生男子126名、女子123名の計378名であり、いずれも大学付属学校の生徒・児童である。

## 2. 調査時期

調査は、1986年10月から12月にかけて実施された。

## 3. 調査項目

### (1) 体育における学習意欲調査(AMPET)

この調査は、西田<sup>13)</sup>が開発し標準化したもので、7つの下位尺度（学習ストラテジー、困難の克服、学習の規範的態度、運動の有能感、学習の価値、緊張性不安、失敗不安）とL尺度からなる5段階評定尺度である。それぞれの下位尺度は、各8項目あるので、総項目数は64である。各下位尺度によって測定される心理的特徴は、以下の通りである。

① 学習ストラテジー：体育学習を効率よく行うためのうまくできる方法や手段をいろいろと考えたり、実行したりする程度を示す。

② 困難の克服：人よりもうまく運動ができるようになろうとして、黙々と練習を続けたり、たとえうまくできなくとも最後までがんばるといった特性を示す。

③ 学習の規範的態度：先生や指導者の話をきちんとまじめに聞いているか、うまくなるために必要な指導や助言を素直に受け入れているか、ルールやきまりなどをきちんと守っているか、といった体育学習での規範的な態度を示す。

④ 運動の有能感：運動に対する自信や優越感に関連し、人よりも運動がよくできると認知している程度を示す。

⑤ 学習の価値：運動がよくできるということに対する価値感や目的意識、学習することの必要性などを示す。

⑥ 緊張性不安：人前で運動するような時に、どの程度緊張したりあがったりしているのかを示す。

⑦ 失敗不安：人に負けるのではないか、試合で失敗するのではないか、といった失敗や負けることへの不安や恐れを示す。

これらのうち、①学習ストラテジーから⑤学習の評価までの5つの下位尺度は、体育学習へ積極的に努力する達成傾向（TS得点）を示し、⑥緊

張性不安と⑦失敗不安の下位尺度は、体育学習から回避しようとする失敗回避傾向（TF得点）を示している。

得点化は、「よくあてはまる」に5点、「ややあてはまる」に4点、「どちらともいえない」に3点、「ややあてはまらない」に2点、「まったくあてはまらない」に1点を与えてなされた。

### (2) YG 性格検査

パーソナリティを測定する尺度として、辻岡<sup>19)</sup>のYG性格検査が用いられた。この検査は抑鬱性(D), 回帰性傾向(C), 劣等感(I), 神経質(N), 客觀性がないこと(O), 協調性がないこと(Co), 愛想の悪いこと(Ag), 一般的活動性(G), のんきさ(R), 思考的外向(T), 支配性(A), 社会的外向(S)といったパーソナリティの側面を測定することができる。

## 4. 調査方法

調査は、学級活動や体育の授業などをを利用して担任教師によって行われ、その後に調査票が回収された。AMPETの実施時には、質問文にててくる「運動」とは体育の授業中に経験する運動のことであり、質問項目の内容も、全て体育授業に関連したものであることが強調された。

## 結果および考察

### 1. AMPET および YG 性格検査の得点

AMPET 各下位尺度得点の平均と標準偏差を、中・高校別に示したのが表1である。そこで、これらの平均値と西田が中学生男女計3,346名、高校生男女計3,489名を対象にAMPETを標準化した時の平均値とを比較してみた。その結果、「運動の有能感」を除く達成傾向の尺度において、今回の対象者の方が高い得点を示した。また、不安に関する失敗回避傾向では、今回の対象者の平均値の方がやや低かった。このような結果は、中学生も高校生も同じ傾向であった。つまり、今回の調査対象は、西田らの標準化集団と比較して、体育学習への意欲がやや高く、逆に不安が低いという特徴を持っていたと考えられる。

表1 学校種別の AMPET 得点

学校種		中学校	高校
調査人数		129	249
1. 学習ストラテジー	M SD	29.35 6.02	27.14 5.43
2. 困難の克服	M SD	28.45 6.19	25.29 5.44
3. 学習の規範的態度	M SD	29.30 5.83	29.08 4.43
4. 運動の有能感	M SD	20.93 7.45	20.82 6.90
5. 学習の価値	M SD	30.11 6.23	28.58 5.52
6. 緊張性不安	M SD	23.32 8.68	23.85 7.58
7. 失敗不安	M SD	20.48 6.71	21.66 5.99
T S 得点 (達成傾向)	M SD	138.14 24.93	130.91 19.76
T F 得点 (失敗回避傾向)	M SD	43.80 14.47	45.51 12.76

一方、表2には、本調査対象者のYG性格検査(12尺度)得点の平均と標準偏差が、中・高校別に示されている。その結果を、辻岡<sup>19)</sup>の標準化集団の平均値との比較でとらえてみると、まず、中学生では、本調査対象者の方が、「抑鬱性(D)」、「劣等感(I)」、「協調性がないこと(Co)」がやや低く、「一般的活動性(G)」、「支配性(A)」、「社会的外向(S)」はやや高くなっていた。また、高校生では、「客観性がないこと(O)」、「一般的活動性(G)」、「支配性(A)」、「社会的外向(S)」において、本調査対象者の方がやや高くなっていた。従って、今回の対象者は、標準化集団よりも、やや好ましいパーソナリティー特性を持つ集団であったと考えられる。

このような調査対象者のやや好ましい特性は、今回対象に選んだのが大学付属学校の児童・生徒であったことから、その学校の特性が反映された結果であろうと推察される。

## 2. AMPET と YG 性格検査との関連性

AMPET 各下位尺度と YG 性格検査(12尺度)との相関係数を、中・高校別に示したのが表3である。これによると、体育学習へ積極的に努力す

表2 学校種別の YG 得点

学校種		中学校	高校
調査人数		129	249
D 抑鬱性	M SD	8.47 5.88	10.96 5.30
C 回帰性傾向	M SD	9.53 4.56	10.34 4.34
I 劣等感	M SD	8.47 5.30	9.89 4.62
N 神経質	M SD	9.09 5.06	10.20 4.87
O 客観性がないこと	M SD	8.46 4.38	9.02 3.93
Co 協調性がないこと	M SD	8.79 4.33	8.13 3.51
Ag 愛想の悪いこと	M SD	11.85 3.48	10.74 3.72
G 一般的活動性	M SD	11.98 3.64	10.87 4.38
R のんきさ	M SD	13.54 3.46	12.40 4.32
T 思考的外向	M SD	10.19 4.28	8.83 4.19
A 支配性	M SD	11.26 4.33	9.79 4.40
S 社会的外向	M SD	13.83 4.12	12.70 4.77

る達成傾向に関するAMPET各下位尺度と、「劣等感(I)」、「協調性がないこと(Co)」、「抑鬱性(D)」との間に低い負の相関がみられていた。また、これらのAMPET下位尺度と「愛想の悪いこと(Ag)」、「一般的活動性(G)」、「支配性(A)」、「社会的外向(S)」との間には、中程度の正の相関関係が得られた。このことは、劣等感に悩まされず、不満も少なく、活動的でリーダーシップがあり、社交的な者は、体育における学習意欲が高くなることを示唆している。

次に、体育学習から避けようとする不安に関する失敗回避傾向を見ると、これらの尺度と「抑鬱性(D)」、「回帰性傾向(C)」、「劣等感(I)」、「神経質(N)」、「客観性がないこと(O)」、「協調性がないこと(Co)」との間には、中程度に高い正の相関が認められた。そして、AMPETの不安に関する尺度と「一般的活動性(G)」、「思考

表3 AMPETとYGとの相関

上段：中学校 (n=129)  
下段：高校 (n=249)

AMPET	YG	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
1. 学習ストラ テジー		-.105*					-.160*	.213**	.270**		.202**	.257**	
2. 困難の克服	-.202*		-.231**	-.211**	-.175*	-.178*	-.162**	.160**	.306**	-.229**	.204**	.201**	
3. 学習の規範 的態度	-.212**		-.132*				-.174*	-.244**	.343**		.330**	.307**	
4. 運動の有能 感	-.240**	-.144*		-.190*		-.137*	-.261**	.233**	.385**	.157**	-.124*	.266**	.298**
5. 学習の価値													
6. 緊張不安	-.327**	-.302**	-.471**	-.435**									
7. 失敗不安	-.473**	-.409**	-.605**	-.536**	-.333**	-.330**	-.156**	-.161**	-.220**	-.160**	-.144*	-.364**	-.328**
T S得点 (達成傾向)	-.216**	-.216**	-.185*	-.165*									
T F得点 (失敗回避傾向)	-.416**	-.371**	-.563**	-.509**	-.238**	-.233**	-.207**	-.178*	-.190**	-.221**	.383**	.113*	-.167**
	-.295**	.319**	.508**	.427**	.262**	.190**	-.142*	-.142*	-.258**	-.160*	-.129*	-.134*	-.355**

\*... p &lt; .05   \*\* ... p &lt; .01

表4 AMPET と YG との相関

上段：中学校 (n=129)

下段：高 校 (n=249)

YG AMPET	情 緒 不安定性	社会 的 不適応性	活動 性	衝動 性	非内省 性	主導 性
1. 学習ストラ テジー			.314** .297**	.245** .231**		.246** .217**
2. 困難の克服	-.211**		.293** .391**	.289** .329**		.344** .302**
3. 学習の規範 的態度	-.184* -.127*	-.185* -.204**	.125*		-.133*	.231**
4. 運動の有能 感	-.232**		.432** .335**	.342** .262**		.332** .251**
5. 学習の価値			.307** .189**	.322** .243**	.179* .130*	.229** .201**
6. 緊張性不安	.431** .435**	.109*	-.294** -.239**	-.362** -.230**	-.290** -.202**	-.482** -.370**
7. 失敗不安	.568** .432**	.300** .180**	-.316** -.239**	-.387** -.210**	-.272** -.116*	-.562** -.313**
T S 得点 (達成傾向)	-.201*		.394** .387**	.341** .322**		.355** .294**
T F 得点 (失敗回避傾向)	.522** .461**	.197* .149*	-.323** -.254**	-.396** -.236**	-.300** -.174**	-.550** -.367**

\*... p &lt; .05 \* \* ... p &lt; .01

的外向 (T)」、「支配性 (A)」、「社会的外向 (S)」との間には、中程度の負の相関関係が得られた。これらの結果は、劣等感や抑鬱性が高く、神経質で情緒不安定な者は、体育学習での不安が高く、逆に、リーダーシップがとれて社交的で活動的な者は、体育学習での不安が低いことを示唆している。これらの結果は、中・高校ともよく似た傾向を示した。

ところで、YG 性格検査は、12尺度のいくつかを組み合わせて 6 つのグループ (因子) に分類することも可能である。それらは、「情緒不安定性因子」、「社会的不適応性因子」、「活動性因子」、「衝動性因子」、「非内省性因子」、「主導性因子」の 6 つである。そこで、これらの因子と AMPET 各下位尺度との相関関係を中・高校別に求め、そ

れらを比較検討することにした。それぞれの相関係数は、表 4 に示されている。その結果を総じて解釈すると、中・高校生とも、情緒不安定や社会的に不適応を起こしている者は、体育の授業をまじめに受けることが少なく、学習場面での不安も高くなりやすい。また、身体を動かすのが好きで活発な性格の者や社交的で指導性を発揮できるものは、体育における学習意欲が高く、逆に不安が高いと言えよう。

本研究では、比較的安定した体育における学習意欲と個人の安定した内的レベル (パーソナリティ特性) との関連性を検討したのであるが、得られた結果を簡単に要約すると、①情緒が不安定で社会的に不適応を起こしている者は体育学習での不安が高い、②活動的、社交的、主導的な者は、

体育における学習意欲が高く、不安は低い、③これらの結果は、中・高校生にはほぼ共通している、と言える。

#### 〈付 記〉

本研究は、昭和61年度文部省科学研修費（奨励研究A、課題番号61780138 研究代表者 西田保）の補助を得て行われたもの一部である。資料の収集にあたっては、各学校の先生方および生徒の皆さんに快く御協力頂くことができました。御協力頂いた方々に対して、ここに深甚の謝意を表します。

#### 引用・参考文献

- 1) 團 琢磨：学習意欲を高める体育授業の構造 体育科教育, 30-4 : 19-21, 1982.
- 2) ド・シャーム（佐伯 育訳）：やる気を育てる教室, 金子書房, 1980, Pp. 332. (deCharms, R., Enhancing motivation, Irvington.: 1976)
- 3) 藤善尚憲：運動意欲と体育の学習意欲 学校体育, 29-6 : 17-23, 1976.
- 4) 伊藤隆二, 坂野 登：子どもの自発性と学習意欲, 日本国文化科学社, 1987. Pp. 192.
- 5) マートンズ（池田 勝訳）：スポーツ・個人・社会, ベースボール・マガジン社, 1979. Pp. 231. (Martens, R., Social psychology and physical activity, Harper & Row ; New York, 1975.)
- 6) 松田岩男（編）：運動心理学入門, 大修館書店, 1976, Pp. 391.
- 7) 松井三雄：体育心理学, 体育の科学社, 1973, Pp. 293.
- 8) 宮本美沙子：やる気の心理学, 創元社, 1981, Pp. 230.
- 9) 宮本美沙子・加藤千佐子：やる気を育てる, 有斐閣, 1982. Pp. 178.
- 10) 西田 保：「児童・生徒の自由記述からみた運動技能学習意欲」総合保健体育科学, 8-1 : 25-45, 1985.
- 11) 西田 保：「体育における学習意欲に関する基礎的研究」総合保健体育科学, 9-1 : 1-18, 1986.
- 12) 西田 保：「教師および生徒からみた体育における学習意欲の因子構造」総合保健体育科学, 10-1 : 1-12, 1987a.
- 13) 西田 保：「体育における学習意欲の尺度構成と類型化の検討」総合保健体育科学, 10-1 : 47-60, 1987b.
- 14) 岡沢祥訓・猪俣公宏：「トップレベルの卓球選手の心理的適性に関する研究」総合保健体育科学, 6-1 : 81-89, 1983.
- 15) 下山 剛：「学習意欲の育て方」品川不二郎（編），子供の意欲を育てる心理学，あすなろ書店，1980, pp. 99-127.
- 16) 品川不二郎：子どもの意欲を育てる心理学，あすなろ書房，1980, Pp. 222.
- 17) 末利 博：学習意欲をどうして高めるか 体育の科学, 20-5 : 275-78, 1970.
- 18) 鷹野健次他 5 名（編）：体育心理学研究, 杏林書院, 1972. Pp. 267.
- 19) 辻岡美延：新性格検査法, 日本・心理テキスト研究所, 1982, Pp. 376.

